

島木赤彦著
平福百穂畫伯裝幀
アララギ叢書第三十二編

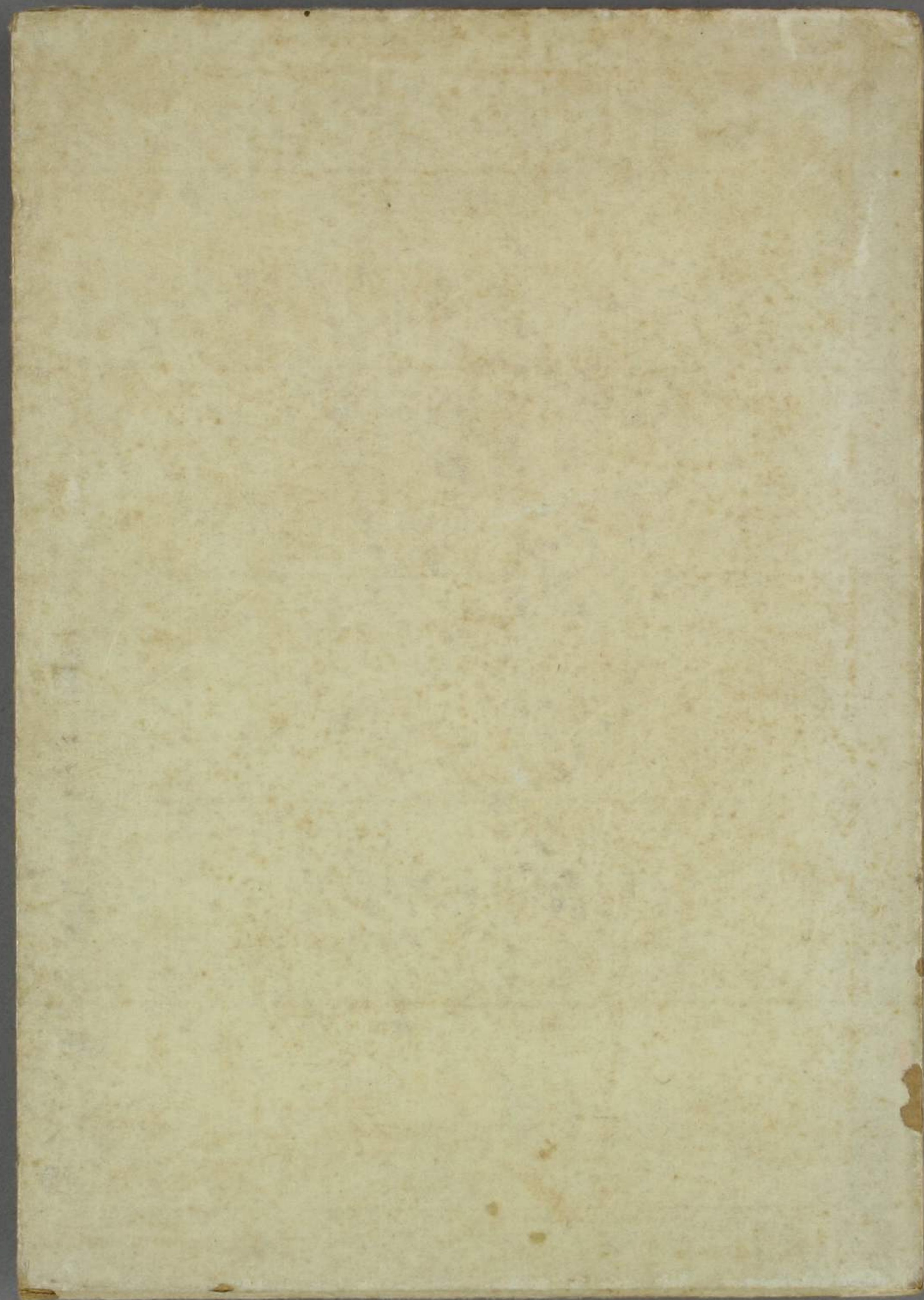
歌集
柿蔭集
しん いん しふ

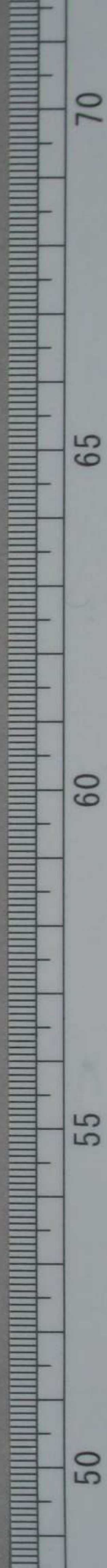
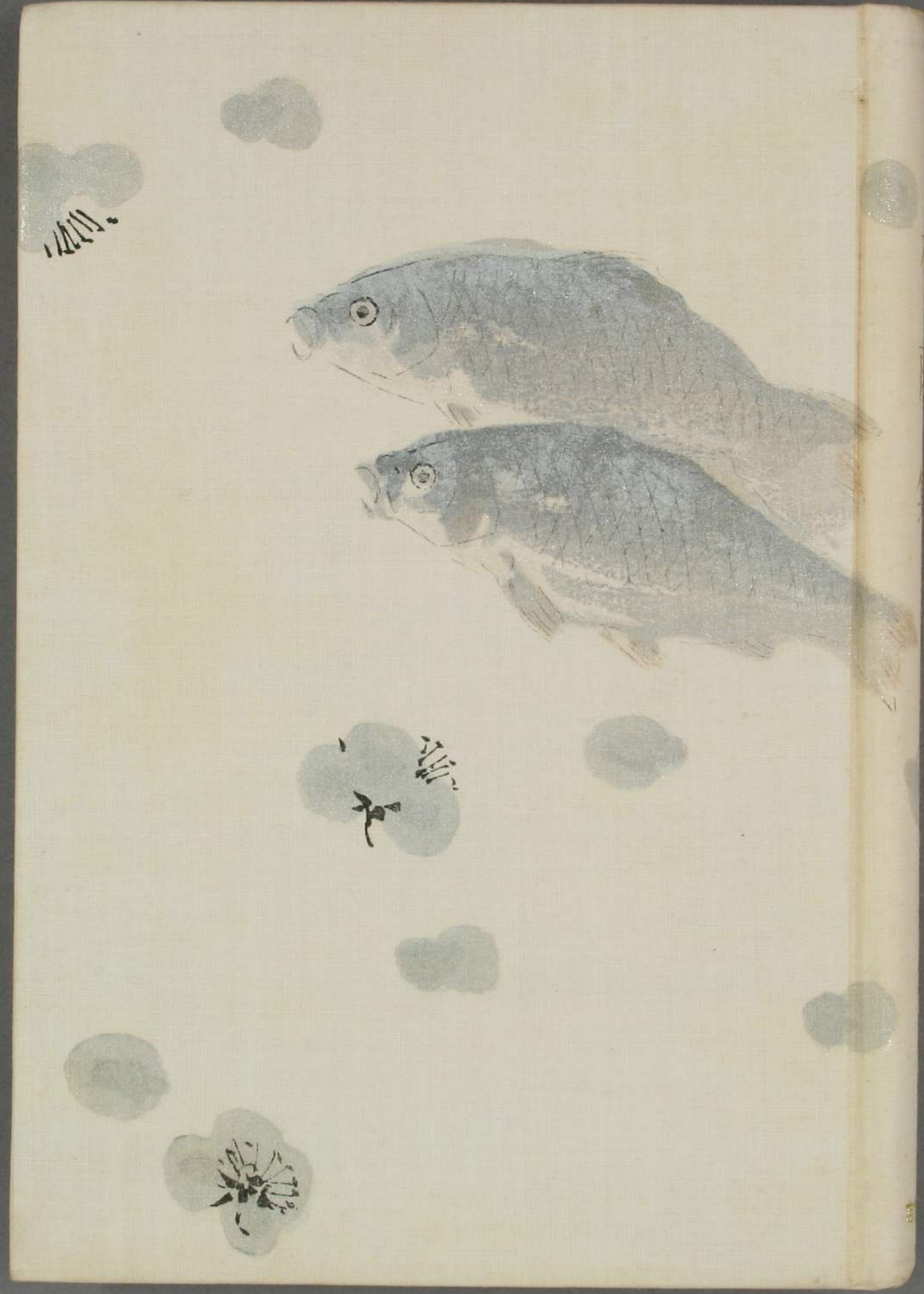
岩波書店刊行

歌集
柿し
蔭いん
集しふ

島木赤彦著

店書波岩

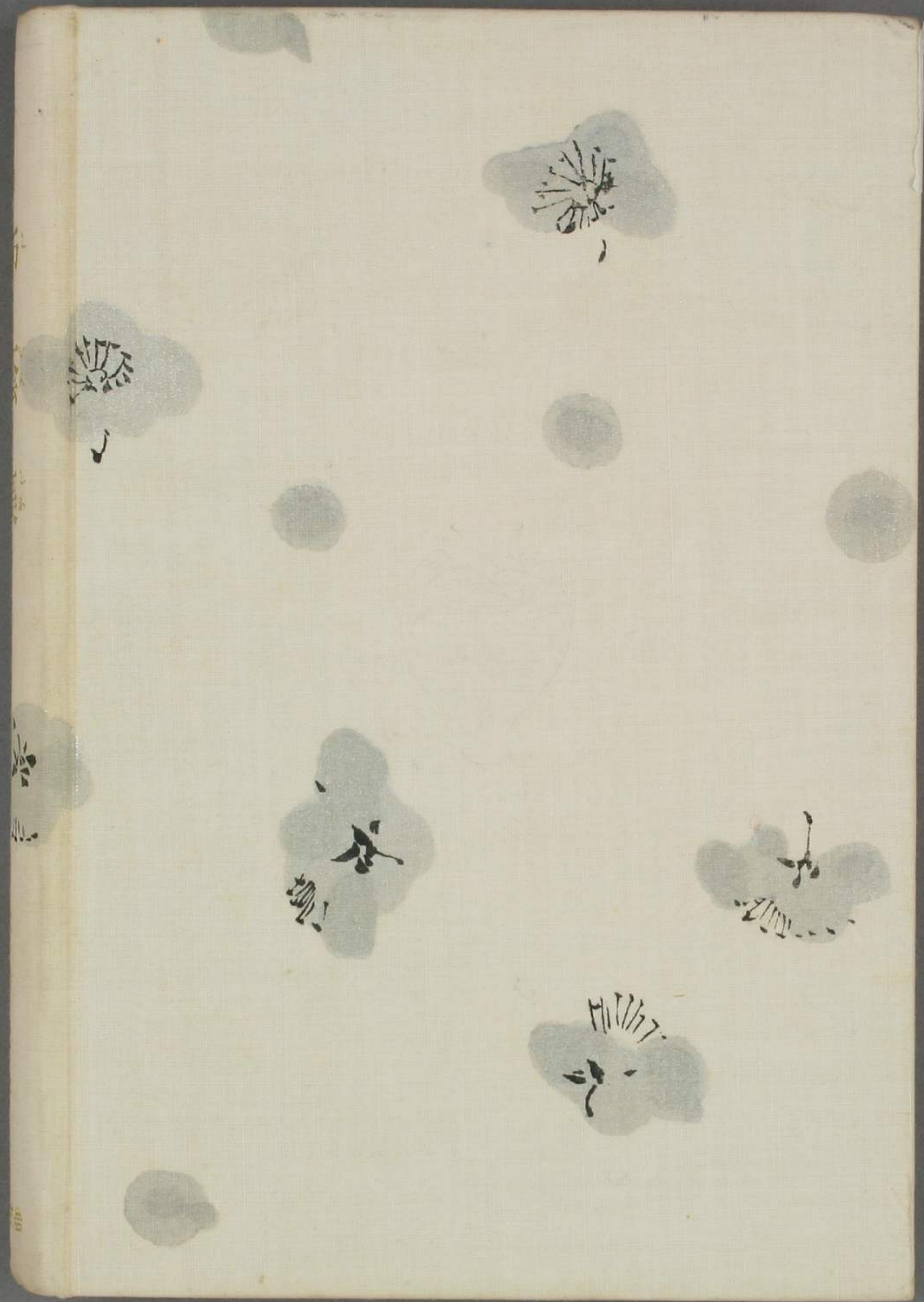


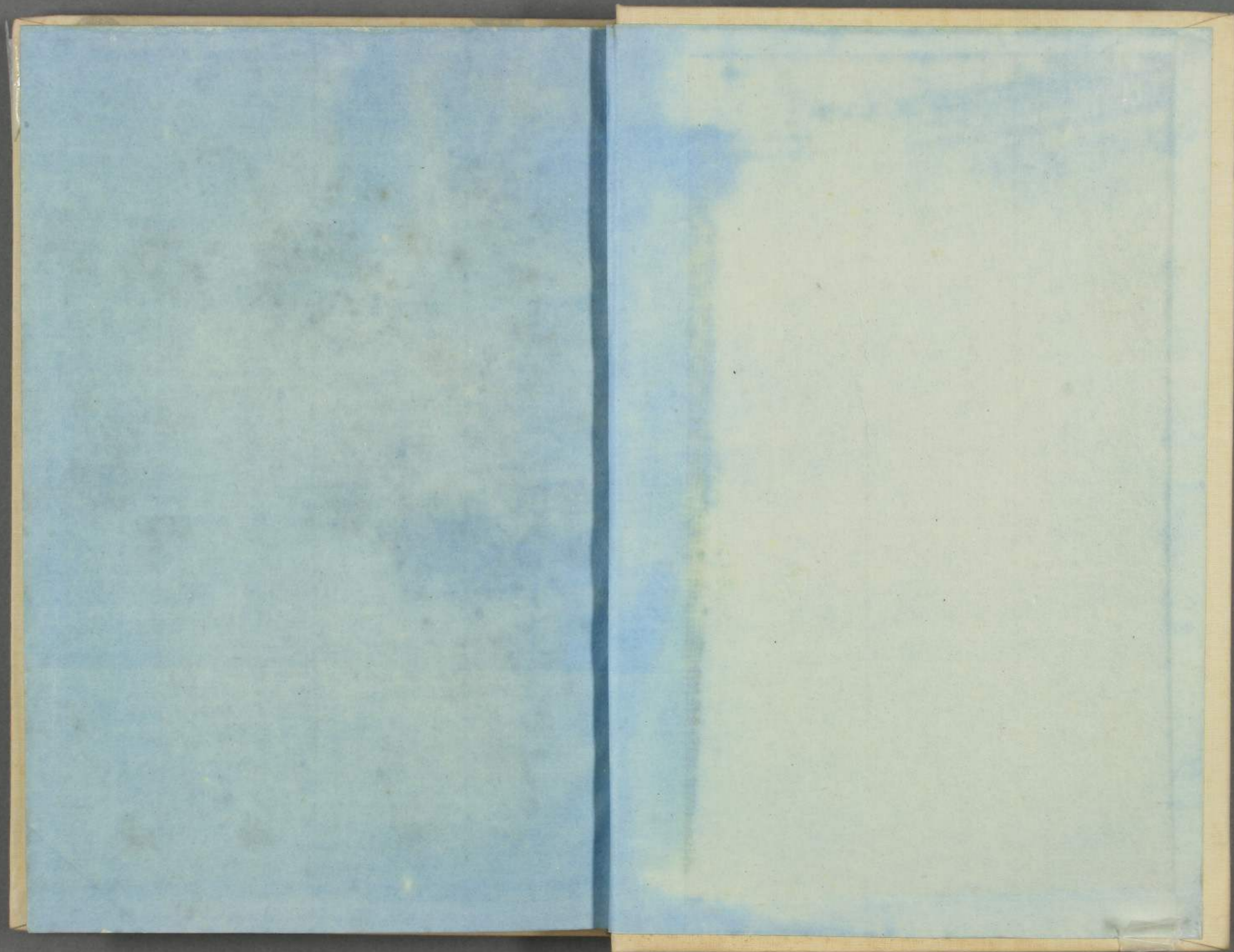


歌集
柿
蔭
集

島木赤彦著

岩波書店







島木赤彦著
アララギ叢書第三十二編

歌集
柿蔭集

岩波書店刊行





土 化

清 出

又 小

水 重

天 下

不 二

百 瓦

土犯行法

曹出てこ

又小は

本堂を

天下息けり

不二の言根を

不瓦

柿蔭集 目次

大正十三年

平福百穂畫伯老母に隨ひて信濃に来る	三
傳田青磁君に寄す	八
木曾の秋	一〇
冬二首	一三
柿蔭山房の冬	一四

大正十四年

齋藤茂吉氏歸朝……………二七
 冬の日……………二八
 下伊那行……………二九
 土肥温泉……………三四
 長塚氏を追憶す……………五二
 柿蔭山房雜詠……………五三
 五月上京……………五八
 初夏……………五九
 温泉委員へ……………六一
 高山國の歌……………六二

高木村……………八三
 浴泉十首……………八五
 信濃下高井郡野澤温泉……………九〇
 七月二十日……………九四
 比叡山夏安居……………九五
 夏安居後……………九六
 柿蔭山房即時……………九七
 峽谷の湯……………一〇三
 八月三十一日……………一二六
 訪歐飛行機……………一二八

憶故人……………一三三
 秋田行……………一三八
 番町の宿……………一四二
 山房内外……………一四五
 山村小情……………一五七
 新年其他……………一六二
 老松集……………一六四
 河井醉茗氏に……………一六七
 上京汽車中……………一七〇
 十二月下伊那行……………一七三

大正十五年

恙ありて一……………一七九
 恙ありて二……………一八三

編輯小記 藤澤古實……………一九九

目次をばり

表紙繪……………平福百穂氏

著者小照……………

短冊二葉其他……………著者筆

挿繪……………平福百穂氏

大正十三年

大正十三年

大正十三年暮春平福百穂畫伯老母
に隨ひて信濃善光寺甲斐身延山に
詣づる途次わが郷を訪ふことあり

母を奉じて信濃の國の古寺に遠來ましつる命
をぞ思ふ

老ゆるもの子に従ひて尊たふとけれ信濃の寺に遠く
來ませり

御佛みほとけのみ庭に花の散るひまも母に隨したがひて心惜を
しまむ

行く春の光惜をしけれ年老いし母に隨したがひてまた
遊ばめや

母堂と晝伯あはとに隨ひて諏訪湖に遊
ぶ

老母は尊くいまし給ひけれ黙に安らかに君が
まにまに

春雨は晴れても寒し老母を舟にのらしめて下
思ふらむ

諏訪上社に詣づ

先に歩み後より歩みかにかくに老いたる母に
心盡きざらむ

傳田青磁君に寄す

このごろの物思ひおほく疲れたらむ君を來し
めて心悔い居り

わが村の往き來の道はいと細し草の夜露に君
を霑らせし

數ならぬ我さへ共に行かましき一つの道に君
を立たしむ

木曾の秋

谷寒^{さむ}み紅葉すがれし岩が根に色深^{りん}みたる龍膽^{だう}
の花

岩が根に早^あ旦^しありける霜とけて紫深^しりんだ
うの花

霜とけてぬれたる岩の光寒し根をからみ咲く
りんだうの花

りんだうの花の紫深くなりて朝な朝なに霜お
く岩むら

岩が根に小指^{をよ}もて引く龍膽^{りんだう}は根さへもろくて
土をこぼせり

冬 二 首

岩山のはざまをつたふ垂^たり水^{みづ}の氷柱^{つらら}となりて
見ゆるこのごろ

睦月むつきすぐるこのごろ著しるし山あひの岩さへ白く
凍る瀧たきつ瀬

柿蔭山房の冬

朝な朝な湖うみべにむすぶ薄氷うすこほり晝間ひるまはとけて日和ひより
つづくも

湖向うみむかひ日ひねもすにして日のあたる枯芝山は暖
く見ゆ

一と俵今年の米を碓にひきて冬構へするわが
家のうち

門川の氷の下に籠りたる水の音幽けし小夜更
けにして

雪の山さやかにうつるみづらみに曉鴨の動き
ゐる見ゆ

よべ一夜浮寝をしけむ水鳥の群れゐる湖の岸
は凍れり

通り過ぐる吹雪の雲の上にして鶯の鳴く音の
聞えつるかも

しばしばも過ぐる吹雪の雲疾し晝の月寒く現
れにけり

山北の峽の雪の消えやらで冬至に近くなれる
このごろ

日並べて底冷えしるき雪もよひ曇りのなかに
日は見えにつつ

三年^み経^へて歸^り來^{れる}家^{いへ}鳩^ぼに餌^えをやる子^こらや交^か
 るがはるに

わが家の庭の氷を踏み歩む鳩のさま寒し紅^{くわん}の
 趾^{あし}

落葉負ひて歸る娘^{むすめ}ら手拭をかぶりて寒し夕ぐ
 れにけり

落葉かく林の入りの山白く雪ぞ降りける昨夜^{よる}
 のあひだに

小林をばやしの落葉をかきて現あらはれし日陰ひかげ羅かづらやうち亂れ
 つつ

西空は日の入るころか雪あれの雲くも紅くれなゐにやや染
 りつつ

北の空開きて寒し雪あれの雲行き疾はやくさわぐ
 日のくれ

大正十四年

出せりけむ
ちちのみの父いまさざる故郷を遠思ひつつ船

齋藤茂吉氏歸朝

冬
の
日

軒のきの氷つら柱ら障子あに明あかく影かげをして晝ひるの飯いひ食くふこ
ろとなりけり

下伊那行

谷川やがわに朝立あしたてつ霧きりや凍こるらし竹たけの葉はむらの白しろく
なりつる

天龍の川ひろくなりて竹多し朝あしたは霧の凍りつ
き見ゆ

山の霧ことごと川に下くだりけむ光身に沁みて晴
るる朝空

川べゆく電車の外は霧深し青空ややに現あられて
見ゆ

谷川のあしたの霧を洩もれてさす光こほしも電
車のなかに

霧のなかに電車止まりてやや長し耳に響かふ
天龍川の音

この日ごろわが胃痛めり曉より電車にのりて
今日も冷えつる

歸り来て一夜見にける子らが顔朝は見ずて汽
車に乗りつる

駒が嶽は奇しき山かも晴れし日も己れ雲吐き
て隠るひにけり

土肥温泉

沼津より修善寺

西吹くや富士の高根にゐる雲の片かた寄りにつつ
 一日ひとひたゆたふ

富士が根を片かた削ぎにしてゐる雲の沈むともな
 し日の夕べまで

富士が根に夕日残りて風疾し靡きに靡く竹む
らの原

船原温泉

夕まぐれあやに静けし山の上にとよもす風の
窟に至らず

巖が根ゆ湧き出づる湯に身は浸り心は遠く思
ひ居にけり

湯の中に肩沈めゐて心安し音して過ぐる山の
上の風

いで湯湧く岩を枕らぎ思ふことありとしもな
く我は思ふも

二た本の椎の大木に注連張りて宜も古りけり
湯の宿の庭

船原より山越三四里にして土肥に
至る

草枯れのいづれの山を人に問ひても天城の山のつづきなりといふ

冬枯の芒うちつづく山道に親しくもあるか稀に人に遇ふ

山なかの枯芝道に親しけれ稀に遇ふ人の皆物を言ふ

道のへのヤシヤの苔は青黝し指につぶし見てわが憇ひ居り

わたつみの海をめぐらして山の上の小笹が原
は騒ぎけるかも

伊豆の海ゆ吹きに吹きあぐる風を疾み埃ぞあ
がる山の上の道

人の足すべる山道にねもごろに柴木並ぶる伊
豆の國人

わが臀の土を擦るばかりこの山の下りけはし
さよ海に向ひて

土肥

磯山の椿の花は咲けれどもいまだ寒けし大海
の色

土肥の山に二日ありける雪とけて風なほ寒し
海あれの音

八木澤の山下海に櫟葉の古葉の落つる春に向
ひぬ

櫟葉は多くは落ちず入海の磯岩かげに音のか
そけさ

逝きし人々の面影今にして皆遙か
なり。心閑なれば即ち想ひ出ず。今年
一月末伊豆土肥温泉にありて

亡きがらを一夜抱きて寝しこともなほ飽き足
らず永久に思はむ

二月三日寺澤高田二氏と舟遊す

土肥とひの海うみ撈こぎ出いでて見れば白雪しろゆきを天あめに懸かけた
り富士の高根は

富士が根はさはるものなし久方の天あめゆ傾かきて
海に至るまで

海の上うへゆ振りさけて見ればわが前に押しおしてか
來きらし富士の裾野は

富士の山裾やまもと曳ひくを見ればうちよする駿河の海
も籠こもる思おもひあり

今日ひと日小舟を浮けて雪白き富士が根の下
に遊びけるかも

富士が根をめぐりて遠し久方の天の垂り所に
疊まる山々

天地のめぐみは常にありといへど思ひて見れ
ば身に沁みにけり

これの世に母と妹のなきことを一日忘れて君
が遊びし

富士が根を仰げる君や舟の舳へに腮あご髯ひげあげてや
 や瘠うせにけり

長塚氏を追憶す

癒いえがたきおのが病やまひを思ひつつ出雲いづみの山の道
 は行きけむ

柿蔭山房雑詠

凍りたる湖うみの向うの森にして入相いりあひの鐘をつく
音聞ゆ

伊那いな風かぜいたく吹く日は湖うみべ田だの温泉いそゆどころに
波打ちにけり

木枯きこの日ねもす吹きて波をあぐる湖うみべの田だの
温泉いそゆはさめにけり

木枯きこの吹きしくままに濁りたる湖うみの波高まり
にけり

古き籠かごに書物かきものと著物きものを詰め入れて吾子わがこは試験
に旅立ちにけり

子どもらの試験を下したに思ひつつ日ねもす物を
書きくらしをり

試験日を忘れて子らに訊ききにけり下思したおもひつつ
事の忙せましさ

曇りつつ雨ふるらしき夕ぐれの縁えんに出で立ち
て背伸せのびびせりけり

五月上京

東路あづまぢにわが来て見れば小ちさき瓶かみに銀杏いんげい葉はさし
て子は住みにけり

初夏

湖うみに入る谷川水の浅き瀬にいささ蟹かにはふ夏と
なりけり

清らかなる山の水かも蟹とると石をおこせば
 砂の流ながらふ

谷あひの小川の草は短くて螢の生れむにほひ
 こそすれ

温泉委員へ

眞心まごころをもてる村人むらびと凍りたる湖うみの底ひより湯を
 掘りにけり

神の代の姿に似たり凍りたる湖うみの底ひより湯
を掘る村人

高山國の歌

踊り止みて静かなる夜となりにけり町を流る
る木曾川の音

大正十四年五月三十日木曾福島町
に齋藤茂吉君と會す。その夜大衆木
曾踊を踊る

佛法僧鳥一聲を聞かむ福島町の夜空に黒きは山なり

五月三十一日木曾王瀧川上流に入る

この谷の若葉はおそし御嶽のみ雪はだらになほ残りつつ

夏にして御嶽山に残りたる雪の白斑は照りにけるかな

谿たにの上のにやや開ひらきたる空青し雪山の秀はの現れ
 にけり

やや暫し御嶽おんたけ山のの雪照りて谿たにの曇りは移ろひ
 にけり

駒ヶ嶽は東方にあり

木曾谷の雲を隔てて相向ふ二つの山の雪斑ゆきまだらら
 なり

わが友と御嶽山の雪は見てなほ峽ふかく入り
 行かむとす

谷川の音さやかに高木より咲きて垂りたる
 藤波の花

谷川の水はやくして藤波の花をゆすぶる風吹
 きにけり

峽の雲はれゆく見れば檜木山黒々として重なり
 にけり

檜木山の光は寒し谷川の早湍の音のひびきわ
たらふ

横さまに若葉にあたる雨疎し照りかげり疾く
なりまさりつつ

谷の空雲剥ぐるごと疾くして雨は若葉に照り
にけるかも

鞍馬に至りて谿漸く深し

岩あひにたたへ静もる青淀のおもむろにして
瀬に移るなり

谷川の早湍のたぎち激ち来てここに静もる岩
垣青淵

川上の遠瀬のひびき響き來る岩垣淵に我しま
し居む

木曾街道より入ること六里にして
氷ヶ瀬に至る

折りをりに心にとめて聞きにけり耳に馴れに
し谷川の音

霧はるる岩より岩にあな寂し傾きざまに橋を
かけたり

驚きて橋をぞわたる谷川の底明らかに渦ま
く
青淀

山人は蕨を折りて岩が根の細徑をのぼり歸り
ゆくなり

山岨道盡くれば橋あり山人の谷の入り深く歸
り行く見ゆ

石楠は寂しき花か谷あひの岩垣淵に影うつり
つ　つ

跣足にて谷川の石を踏みわたり石楠の花を折
りにけるかな

石楠の花にしまらく照れる日は向うの谷に入
りにけるかな

夕ぐるる谷川はたに石楠の花を折らむとする
 が幽^{かそ}けさ

谷川の早^{はや}湍^{たぎ}のこゆる石むらのありの清^{すが}しさ水
 の底ひに

氷ヶ瀬に泊る

雲下る眞^ま木^き山^{やま}竝^なみの谿^{たに}にして我は宿^{たど}らむ夕ぐ
 れにけり

谷なかに檜木づくりの小屋一つ心静まりて我
は眠らむ

谷川に米を磨きたる宿の子の木の間がくり
に
歸り來るなり

佛法僧鳥啼く時おそし谷川の音の響かふ山の
夜空に

谷川の早湍の音をうち亂し夜風ぞ騒ぐ雨來る
らむか

谷川の早湍のひびき小夜ふけて慈悲心鳥は啼
 きわたるなり

朝あけて檜の木の山の木のまより上のるものあ
 り雲にかもあらむ

高木村

谷あひ川浅瀬の砂の粗くして曉のあさけの光
 沁むなり

二つゐて郭公たけのこどりの啼なく聞けば銜くはのごとしか
はるがはるに

みづうみに向ひてひらく谷口たにぐちの木こがくり水よ
音たつるなり

浴泉十首

白雲は向うの谷をゆきしかばいで湯の底そこに目
は照りにけり

白雲は眞晝向うの谷をゆき我はいで湯に静ま
りにけり

山なかあしたは朝寒けし湯の底に白くし見ゆるわが
足の色

杉すぎ生なま洩ひる晝の光は幽かそかにていで湯の底に直ただに
透とほれり

伊豆の湯は男女をとこをんなら共に浴あめり山深く来て疑ふ
ものなし

男女をとこをみな共に湯を浴あめり山川やまがはの自おのづからなる心にしあ
らむ

晝ひるの湯の光は寂し黒みたる女をみなの乳をわれは見
にけり

湯の中に静しづまる時は耳に馴れし谷川の瀬の聞
えつるかも

子どもらが湯にのこしたる木の葉舟はぶね口をすぼ
めて我は吹きをり

男女をとこをんな共に湯を浴あめり山川やまがはの自おのづからなる心にしあ
らむ

晝の湯の光は寂し黒みたる女をんなの乳をわれは見
にけり

湯の中に静しずまる時は耳に馴れし谷川の瀬の聞
えつるかも

子どもらが湯にのこしたる木の葉は舟ふね口をすぼ
めて我は吹きをり

山の湯に雀の居りて朝夕に餌ネを拾ふこそやさ
しかりけれ

信濃下高井郡野澤温泉

雪のこる遠山白し湯の庭の桑の高木に實ミの熟ク
るころ

雪のこる山をかぞふれば五つありいで湯の里
に夕著ツきにけり

桑のみを爪^{つま}だちあがり我は摘む幼きときも斯
くのごとせし

桑の實^みを食^はめば思ほゆ山の家^{いへ}の母なし子にて
ありし昔を

桑のみのか黒^{くろ}く熟^うるる水^{みづ}無^な月の雨^{あま}あがり野を
我は歩むも

はるけくも年はなりにけり桑のみを口さへ染^そ
みて我は食みけむ

七月二十日

わが庭の敷石のうへにかぶされる秋萩の花咲
きそめにけり

比叡山夏安居

大衆の多くゐねむれる講堂をめぐるておこる
ひぐらし
 蛸のこゑ

比叡山の夏安居より下りて暫く東
京にとどまる

わが家の萩も盛りとなりつらむ妻子も湯より
はや歸りつらむ

柿蔭山房即時

能^の登^との湯に病やしなひてゐる子より手紙とど
けり我も旅なる

久しくも夕顔の花の咲きつぎて棚にあまれる
蔓伸びにけり

夕顔の棚の末蔓^{ツル}屋根にのびて白き花さく秋と
なりにし

夕顔の果^みは垂り花は咲きに咲きてその末^{つひ}の蔓
は伸びに伸びにけり

夕顔の花ほの白くたそがれて清^{すが}しと思ふ月立
ちにけり

戸を閉^まさで灯影^{ひかげ}のとどく草むらに蟋蟀^{こしほ}鳴けり
この二夜^{ふたよ}三夜^{みや}

うちよりて夜^よは茶を飲む子どもらの休暇も果
てぬこほろぎの聲

小夜なかに二たび起きて蚤をとれりかかる歎
きも年経^ふりにけり

わが庭の萩の花藪の下にして蟋蟀を追ふあは
れ仔猫^{ねこ}は

萩が根に動くこほろぎを覘うかがひたる仔猫こねこはあは
れ居睡りにけり

萩の下に日影をよきて眠りたるひよこ五つよ
相居あひま寄りつつ

峡谷の湯

馬上程遠し。ここは八ヶ岳の裾野な
り。地高くして冷早く至る

驚きて山をぞ仰ぐ雲の中ゆあらはれて見ゆ赤
崩えの山

わが馬の腹にさはらふ女郎花色の古りしは霜
や至りし

わが足に馬の腹息を感じつつしまし見はるか
す高野原の上

皆がらに風に揺られてあはれなり小松が原の
桔梗の花

わが馬の歩み自ら止まりて野中の萩の花喰ひ
にけり

秋の日の目でりを熱み草の中に入りてぞ歩む
あはれわが馬

馬を下りて苺を食めり野の末に遠ざかる山の
低くなりつる

野苺の赤き實いくつ掌にのせて心清しく思ひ
けるかな

野苺の赤實の珠は露をもてり心鮮けき光とい
はむ

斯くゆゑに我は山に來野苺の一つの實にも光
沁むもの

山かげに深山雀といふ鳥の蛸ひぐらしに似て鳴くあは
れなり

山の上に残る夕日の光消えて忽ち暗し谷川の
おと

谿深くして木立古りたり。
志す所は赤岳温泉なり。

仆たふれ木ぎにあたる早湍はやたぎの水も見つ寂せしさ過ぎて
我は行くなり

深み山やま木ぎの仆たふれ木ぎくぐり行く水のささやかにし
てせせらぎにけり

山深く馬を曳き来てあはれなり人に言ふ如く
物言ものいふ馬士まごは

深山木の白蘿掠めて過ぐるもの雲とかも言は
む雨とかも言はむ

山道に日は暮れゆきて梅の葉に音する雲は過
ぎ行きにけり

温泉より千段瀧に至る

白蘿垂る木のたたづまひ皆古りて心に響く瀧
落つるなり

谷かげに苔むせりけるたふ 木をいき息づきこ踰ゆる
我老いにけり

赤岳温泉數日

安らかなる眠りに向ふ時のあひだ谷まの水の
音を聞くなり

谷の入りの黒き森には入らねども心にふ觸りて
起臥す我は

奥山の谷間の榎の木がくりこに水沫みわ飛ばして行
く水の音

入り来つる森の蘚地こひぢの深くして踏みごたへな
く思ほゆるなり

たまさかに里より上のぼり来る馬あり谷の下遠く
嘶いなき聞ゆ

山に育ちて人來れば吠ゆる宿の犬尾をうち振
りて直ぐなるるなり

湯の窓に下るかと思ふ雲疾し赤岳山ゆただに
垂り來し

物讀みつつ我は聞き居り折りをりに谷のうつ
ろにこもる風音

沸かしたる山の朝湯に蜘蛛も蟻も命終りて浮
びるにけり

山の上に寂しく見ゆる大岩の道心岩と名づけ
そめけむ

岩崩^{いば}えの赤岳山に今ぞ照る光は粗^{あら}し目に沁^{しみ}みにけり

板^{いた}縁^{えん}はいたく霑^ぬれたり一^{ひと}しきり通り過ぎたる
雲^{うみ}と思^もひしに

梅山の茂りは暗し横さまに雨脚見ゆる風立ち
にけり

梅の葉に音する雲は折りをりに小雨になりて
過ぎ行かむとす

雲疾み現れ出でし山の上の空さやかなり七日
月の影

雨霧の中に見えつる七日月あやしく明し晴れ
ゆくらむか

山深く起き伏して思ふ口鬚の白くなるまで歌
をよみにし

かへらざる我に悔あり山ふかく心静まりて思
ひ出でつる

梅の茂りただに黒める谷の入り恐れをもちて
戀ひ思ふなり

高山ゆ雲を吹き下ろす風止みて鶯鳥の聲やや
ひびくなり

明日立たむ心惜しみに出でて見つ月さへ照れ
り谷川の水

谷川の音を惜しみて出で來しに月ののぼるは
何の幸ぞも

湯の窓につづく白檜しらひのの葉の光霜ひかりしもと見るまで月
照りにけり

八月三十一日

遠く學ぶに堪たへなむものかこのあした涙おと
して子は行きにけり

夏ながき家ゐに馴なれて行きがてに思おもふらむ吾
子よ髪かみを結ゆひつつ

訪歐飛行機

安邊河内片桐篠原四氏に寄す

飛行機の下に烏拉爾ウラルの山も見えず行きに行き
 けむ雨雲あまぐもの中を

雲浮ぶいく山川の上にしてありけむ心惚しほびか
 ねつも

亞細亞を過ぎ烏拉爾をこえていや行きに行き
けむ空よ目をとちて思ふ
世をこぞり思ひにけらし青雲のそきへがうへ
にありとふ君を

益良夫を遠空にやりて日の本の國つみ神も思
ほすらしも
天の原振りさけ見れば西に入る日よりも遠く
思ほゆる君は

名^な細^こしき初^{はつ}風^{かぜ}東^{こち}風^{かぜ}の向^むふところ雲も開^{ひら}きて晴
れゆきにけむ

西の空にい行きつくとふ文をよみて涙^{なみだ}拭^{ぬぐ}へり
我のみにあらず

憶故人

長塚節氏の出雲に旅せしは喉頭結
核の宣告を受けし後なり

白雲の出雲の寺の鐘一つ戀ひて行きけむ命を
ぞ思ふ 一首訂正作

釣鐘を爪だたきつつ聞きにけむ音も命もかへ
ることなし

霜白き出雲の道よわが君の咽喉に沁みて冷え
わたりけむ

悲しみを文に手紙に告げざりし君が命し思ほ
ゆるかも

他人の手紙をはじめて君が見せし時
 我的心に永久に沁みけむ

途徹もなき愚かさに君の驚けり
 笑ひて我の顔を見ましし

今日ここに君が遺稿は編みしかど
 猶歡びに遠き思ひあり

病中記 蟲眼鏡もて讀みにけり
 細かに至るあはれ御ころ

年の立つあしたの床に筆とりて芋の肥料を母
に言ひつる

秋田行

多年の望みかなひて十月三十一日
夜百穂晝伯の郷國に向ふ

遊ぶ時いたりにはけらしみちのくの鳥海山に雪
のふるころ

秋早く稲は刈られてみちのくの鳥海山に雪ふ
りにけり

をちこちの谷より出でて合ふ水の光寂しきみ
ちのくに來し

みちのくの谷川はたの杉黒し茂吉が生れし家
の屋根見ゆ

栗原の素枯れ紅葉の道さむく田澤の湖に下り
行くなり

旅遠く友に随したがひてみちのくの秋田の國の米食
ひにけり

番町の宿

武藏野原枯れゆくころは町中の庭に小禽こまがの來
て鳴きにけり

二階にて鳥のけはひの聞ゆるは廂ひましの下の木に
來居きゐるなり

みちのくの秋田あがたゆ歸り來て今日もこ
ろよくわが疲れをり

わが心に懈怠けたいやありて風邪かせひきし爾しか思ひつ
つ眠りけるかな

山房内外

風邪ひきて心ゆるやかにけり昨日も今
日もおほく眠りぬ

斯ることもあり

幼子が母に甘ゆる笑み面の吾をも笑まして言
忘らすも

秋去冬來

秋ふけて色ふかみゆく櫟生の光寂しく思ほゆ
るかも

山の上の段々畠だんだんはたに人動けり冬ふけて何をす
るにやあらむ

この眞晝まひる硝子がらすの窓の青むまで小春の空の澄
みにけるかな

胡桃くるみの實もてば手に染しむ青皮のほひも親し
秋さりにけり

秋といへば庭のうへなる胡桃くるみ木の實落しおと
して葉も透すきにけり

霧下りて久しとぞ思ふわが庭の庭木に鶉ひよのゐ
る聲聞けば

霧の中に透たはりそめたる日の光り心こゝろひそまりて
我は待ち居り

雪をかむる山の起き伏し限りなし日に日けに空
の澄みまさりつつ

冬にして日和のつづく庭の上に山椒さんせうの實は色
づきにけり

覺^{おぼ}えある幼き時の土藏^{くら}の壁に冬菜^{ふゆな}をつりて今
も吊^つるなり

木枯^この吹きしづまりし夕ぐれどき梁^{うつほり}の煤^{すす}の猶
落ちにけり

冬の湖^{うみ}の時^{とき}照^てりすればここだくも鴨^鴨の首見ゆ
波のあひだゆ

柿の葉はいまだ落ちねば折りをりに時雨のあ
めは音たてにけり

霧の上に遠山の端はの見えそめて小春さだの日和定
らむとす

朝霧は低くしあらし青空のけはひはつかに見
えそめにつつ

子ども演習にゆく

脚あしの病びょうもてる子どもの演習を我は思ひて夢に
見にけり

霜白き落葉をよせて焚けりとふ中學生の演習
あはれ

わが子らの足裏あしうらの肉刺にくざをあはれみつつ焼火やきび箸ばし
をば押しあてにけり

山村小情

柿の葉は色づかずして落ちにけり俄はなかに深き
霜や至りし

この朝あした降りける霜の深くして一時ひとときに柿の葉は
落ちにけり

草の家に柿をおくべき所なし縁えんに盛もりあげて
明あかるく思おもほゆ

蜂屋はちや柿がき大きおほき小こさき盛もりあげて心明こころあるく眺ながめわ
が居ゐり

山つづき柿の畑に雲の來て時雨ふる日は寂し
かりけり

柿の實を摘むこと遅し故郷ふるさとの高嶺たかねに雪の見ゆ
る頃まで

柿の木の上より物を言ひにけり道を通るは皆
村の人

わが門かどの道行く人は音たてて柿の落葉を踏み
にけるかも

前山の芒を刈りて光さむし巖いわのむれの現あらはれに
けり

前山の芒にのこる夕づく日今宵も早く霜や至
らむ

新年 其他

見ゆる限り山の連りの雪白し初日の光さしそ
めにけり

落葉松の芽ぶきは早しこの山の谷の底ひに雪
残りつつ

老松集

年老いし村人某に與ふ二首

田を作り蠶を飼ひて老いにけり尊くもあるか
その老人は

鍬をもちて楽しむ色あり田に畑に親しみ深く
老いにけるかな

小夜更けて土に汎あまねく霜のふるけはひにやあら
ん立ちそめにけり

庭の松四方しほうに伸びて土を偃やすへり老いたるもの
に霜のさやけさ

大き石の一つを置きて庭の眺め何か動けり朝
朝の霜

河井醉茗氏誕辰五十年なりと聞く
に己も同庚なりければ

行き行きて五十路の坂も越えにけり遂に寂し
き道と思はむ

この道に寂しき光常にありていくたりの人を
行かしめにけり

和泉なる界の浦にわが君と水を浴みしは三十
年の昔

海にして君がかうべに照りにける月の光は思
ほゆるかも

君は詩に
おのれは歌に
別れたる道なつかしく
顧みるかな

上京汽車中

村一つ野中に寂し
八ヶ岳を埋めつくしたる雲
下るなり

枯草原高株
刈りの榛の木に
押し下る雨雲
の脚

汽車の窓にふる霧久し
 經本の折本よみてゐる
 少女あり

經よみつつ眠れる姉の鼻の孔へ紙撚をさしぬ
 あはれ女童

汽車のなかに姉と妹の餘念なし
 講談本をよみ
 交はし居り

十二月下伊那行

わが電車は冬山裾の松原の小松が枝に觸れて
行きにける

はだら雪降りける松のあひだより覗き見にけ
り天龍の川を

小夜更けてたぎつ早瀬の鳴りわたる川の向う
か伊那節の聲

霜白き電車の道よわが腰の神経痛に沁みて光
れる

日は照りつつ寒き電車よ川原の小松の霜も未
だ解けなくに

この家に冬至梅の花すでに咲けり掌に沁みて
我は折りつる



日は照りつつ寒き電車よ川原の小松の霜も未
だ解けなくに

この家に冬至梅の花すでに咲けり掌に沁みて
我は折りつる



大正十五年

ささやかなる室をしつらへて冬の日の日あた
りよきを我は喜ぶ

恙ありて一

今にして我は思ふいたづきをおもひ願かへりること
もなかりき

この夜ごろ寝ぬれば直ぐに眠るなり心平らかに
我はありなむ

みづうみの氷をわりて獲えし魚を日ごとに食ら
ふ命いのち生きむため

寒かた鮒ぶなの肉を乏しみ箸をもて梳すきつつ食らふ樂
しかりけり

寒鯛の頭も骨も嚙かみにける昔思へば衰へにけ
り

○

さうさぎの毛の裘衣かほじろわれは著て今日もこもら
ふ君がたまもの

恙ありて二

あしたより日かげさしいる枕べの福壽草の花
皆開きけり

朝日かげさしの光のすがしさや一ひと群むらだちの福
壽草の花

二月一日上京

もろもろの人ら集りてうち臥ふす我の體からだを撫で
給ひけり

わが腰の痛をさすり給ひけるもろもろ人を我
は思ふも

二月十三日歸國晝夜痛みて呻吟す
肉瘡せに瘡せ骨たちになつ

生き乍ら瘡せはてにけるみ佛を己れみづから
拜みまをす

或る日わが庭のくるみに囀りし小雀來らず牙
え返りつつ

火箸もて野菜スーブの火加減を折り折り見居
り妻の心あはれ

隣室に書よむ子らの聲きけば心に沁みて生き
たかりけり

春雨の日ねもすふれば杉むらの下生の笹も
るほひにけり

信濃路はいつ春にならん夕づく日入りてしま
らく黄なる空のいろ

わが村の山下湖の氷とけぬ柳萌えぬと聞くが
こほしさ

信濃路に歸り來りてうれしけれ黄に透りたる
漬菜の色は

風呂桶にさはらふ我の背の骨の斯く現れてあ
りと思へや

魂はいづれの空に行くならん我に用なきこと
を思ひ居り

神経の痛みに負けて泣かねども幾夜寝ねば
 心弱るなり

この頃の我の楽しみは飯をへてあつき湯をの
 む漬菜かみつ

漬菜かみて湯をのむひまもたへがたく我は苦
 しむ馴れしにやあらむ

三月十三日

我が病あひ悪あしとあらねど遠國あより來りし人に
むかへば泣かゆ

三月十五日

箸あをもて我妻あは我あを育あめり仔あとりの如く口開あ
く吾は

三月十六日

たまさかに吾を離れて妻子らは茶をのみ合へ
よ心休めに

三月二十一日

柿蔭集終

我が家の犬はいづこにゆきぬらむ今宵も思ひ
いでて眠れる

編輯小記

○大正十五年二月一日に上京なされたのが、先生の東京においでになった最後である。此ころ既に自ら胃癌の疑ひを有つて居られたので、今年暮頃までに『太虚集』以後の歌を一冊に纏めたいと言つて居られた。斯るお考へがあつたので、御存命中に一渡り覽ていただきたいと思つた私は、辻村直氏と堀内皆作氏に依頼して、内々御歌の書寫を急いだのである。二月十三日に信濃へ歸られた先生の病氣は、その後日一日と進み、三月十八日に私が參上した時には、非常に衰弱なされてゐた。たしか二十日だ

つたと思ふ先生の病床に侍して居た私が、太虚集以後の歌集に就いて意見をお聞きしたことがある。其時先生は、宜しいやうにやれ、題目もいやうに附ける」と言はれたのみで、具體的のことは一言も言はれなかつた。私は心のうちでもつと具體的のことをお聞きしたいと願つたが、これ以上お聞きするに堪へない状態であつたのである。この時、話の次手に、辻村、堀内の兩君に頼んで書寫して貰つてゐるのが、近いうちに出来るから御覽に入れたいと言ふと、今とても目を通すことは出来ないといふ意味のことを言はれた。兩君に依頼した書寫は、先生御逝去の後、一週間ほどして出来上つた。それを本として、配列體裁等を考へながら、淨書し了つたのは、先生の四十九日の前々日である。

○本書を「柿蔭集」と題したのは、先生が始終用ゐて居られた「柿蔭山房」の頭二字を採つたのである。御生前に、題はいいやうに附けると言はれたので、先生の最近の御歌の中から詞を探して見たり、赤彦遺詠集なども考へて見た。「柿蔭集」も頭に浮んだ一つであつて、偶訪問せられた土屋文明氏に、相談して見たりなどした。そして五月十七日に、平福百穂、畫伯の白田舎で、畫伯、岡麓氏、齋藤茂吉氏、中村憲吉氏、土屋文明氏、胡桃澤勘内氏、竹尾忠吉氏、高田浪吉氏、及び私の九名が集つたアララギ編輯會の折、「柿蔭集」と確定したのである。

○本書には、大正十三年十一月發行の「太虚集」以後に發表せられた短歌の全部と、發表されないもので、半切などに書いて人に贈られたもの、例へば、

大正十四年の温泉委員へ「比叡山夏安居」大正十五年の「恙ありて二」の中の

魂はいつれの空に行くならん我に用なきことを

思ひ居り

（この歌は、今年四月號「アララギ」への送稿中、初瀬さんの代筆で一旦書かれたのを消してあつたもので、暫く出さないうで置くやうにと言はれたさうである等、等を合せて、總て三百九首を収めた。先生自身で編輯されるのであつたら、推敲は言ふまでもなく、この中の幾つかを捨てられたかも知れない。

○本書の歌の多くは「アララギ」に掲載されたものであるが、他の新聞雑誌に出されたのも尠くない。「高山國の歌」「柘蔭山房即時」「峡谷の湯」の一部分

を雑誌「改造」に、「浴泉十首」を雑誌「女性」に、「訪歐飛行機」を「東京朝日新聞」と「大阪朝日新聞」に、「秋田行」を「國民新聞」に、「峡谷の湯」の一部分を雑誌「思想」に、「秋去冬來」を雑誌「文藝春秋」に、「憶故人」を雑誌「新小説」に、「河井醉茗氏」を「大阪朝日新聞」に載せたる等、その主なるものである。不斷用ゐられた手帳の中の未定稿のぞの書簡の中へ書き込んで人に送られた歌等は、その蒐集を他日に譲ることにした。

○本書の編輯は、先生の前者「太虚集」に倣つたのであつて、排列は大體制作順に従つたが、同一の事柄で、作歌の時を異にし若しくは別々に發表せられたものは、一つ所に集め、制作が長くかかつて發表が甚しく後れたものは、事柄の順序によつて前へ上げたものもある。大正十四年に發表せられ

たものが、大正十三年の中に入れてあり、大正十五年に發表せられたものが、大正十四年の中に入つてあるのはそれである。

○事柄の順序は、大體私が戴いた書簡と、アララギの編輯所便を便りにして極め、未詳のもの、例へば、大正十三年の「木曾の秋」を、木曾福島町の北原禎一氏より、傳田青磁君に寄すを、傳田氏より教へていただいたりした。猶大正十三年の「平福百穂畫伯老母に隨ひて信濃に來る」は、本來なら「太虚集」に入るべきものであるが、發表せられたのが「太虚集」發行以後なので、本集へ入れることになつた。これに就いては、嘗て先生もさう言うて居られたことがある。

○發表當時に、題目及び詞書の無いものを、體裁上、一致させるために、便宜

私が書き加へたもの、及び極く僅かではあるが書き改めたものがある。

大正十三年の「冬二首」柿蔭山房の冬、大正十四年の「冬の日」土肥温泉「柿蔭山房雜詠」初夏「温泉委員へ」高木村「比叡山夏安居」赤岳温泉數日「秋田行」番町の宿「十二月下伊那行」、大正十五年の「恙ありて二」に對して「恙ありて一」としたる、

さうさぎの毛の表衣かほころもわれは著て今日もこもらふ

君がたまもの

の歌の前に○を附したる、三月十三日「三月十五日」三月十六日「三月二十一日」と題したる等である。これ等に就いては、すべて私が責を負はねばならない。私が新に附けた題で、詞書にした方がよいもの、詞書で題にした

方がよいと思はれるもの、或は不要と思はれるものは、それぞれ讀者の判断によつて味つていただきたい。詞書と思はれるものは、なるべく五號活字を使ひ、題と思はれるものは十二ポイントを使った。私が新に附けた題及び詞書も、大體さうしたつもりである。

○雑誌へ發表せられた通りに書寫して見ると、總體に振假字が少いので附けた方がよい、と思はれるものには、新に附けたものが幾つかある。若しも間違ひがあれば、その責は私が負ふべきである。

○目次には、本文の詞書或は題目をそのまま表したが、往々私が簡単に書き改めたものもある。大正十三年の「平福百穂畫伯老母に隨ひて信濃に來る」、大正十四年の「夏安居後」河井醉茗氏に等それであつて、本文で題や詞

書を書き加へたと同様に、その是非の如何は總て私の責任である。そして平福百穂畫伯老母に隨ひて信濃に來る」として、本文の中の「母堂と畫伯」とに隨ひて諏訪湖に遊ぶ、諏訪上社に詣づ等の詞書、或は「土肥温泉」として本文の「沼津より修善寺」船原温泉等の詞書を、一々目次へ表さなかつたのは、目次の繁雜を避けるためであつて、「高山國の歌」「峡谷の湯」悉ありて等も同様の形式をとつた。

○「比叡山夏安居」の歌は、初め

山深く我々等居にけり講堂をめぐりて起こる蜩の

こゑ

であるのを、後に推敲されたものである。

「秋田行」の歌は、昨年十一月平福百穂畫伯の畫に添へて、旅行先より數回「國民新聞」に寄せられたものと、昨年十二月號「アララギ」に發表せられたものとである。その中「アララギ」に

遊ぶ時いたりにけらしみちのくの鳥海山に雪の
ふるころ

と發表せられたのが、新聞には

遠々にわれは來にけりみちのくの鳥海山に雪の
ふるころ

となつて居る。なほ新聞には「田澤湖畔にて」として、湖の水清冽無比、紅葉やや素枯れて秋の氣の身に沁むを覺え候 赤彦などの言葉もある。こ

れ等の載つた新聞の切抜は、村田利明君から見せていただいた。

「山村小情」の中の

わが門の道行く人は音たたて柿の落葉を踏みに
けるかも

は、發表後に、堀内皆作君の戴いた短冊には

わが門を通る人らは音立てて柿の落葉を踏みて
行くなり

となつて居るさうである。

「峡谷の湯」の中の

山道に日は暮れゆきて榊の葉に音する雲は過ぎ

行きにけり

を、昨年の暮に名古屋の松坂屋の需めによつて、色紙へ

山道に日は暮れゆきて、梅の葉に音する雨は過ぎ

行きにけり

と間違へて書いたのを、色紙の代りがなかつたため、知つて居られながらそのまま送られたと、高田浪吉君より聞いた。

「十二月 下伊那行は、大阪毎日新聞」とアララギに載つたもので、中村憲吉氏より送つて戴いた新聞の切抜を見ると、アララギに載つた

霜白き電車の道よわが腰の神経痛に沁みて光れる。

の歌が

霜白き電車の道よわが腰の神経痛に沁む思ひあり。

となつてゐる。これはアララギに發表せられた方が後なので、本書へはそれを載せることにした。

本年四月號雑誌「改造」に發表せられた六首のうち

信濃路に歸り來りてうれしけれ、黄に透りたる莖漬のいろ

風呂桶にさはらふ、我の背の骨のいたくも、我は瘦せにけるかな

神経の痛みに負けて泣かねども夜毎寝られねば
心弱るなり

の三首は、同じ四月號の「アララギ」に送稿されたのは

信濃路に歸り來りてうれしけれ黄に透りたる漬

菜の色は

風呂桶にさはらふ我の背の骨の斯く現れてあり

と思へや

神経の痛みに負けて泣かねども幾夜寝ねば心

弱るなり

となつてゐる。「アララギ」に送られたのが後なので、その方を本集へ掲げ

ることにした。去五月十六日の芝増上寺に於いて行はれた先生の追悼
會に、熊本から參會された赤星信一氏に聞いたのであるが、二月末に、同氏
と美作小一郎氏と連名で、先生の病氣御見舞として、釋迦市の木彫りの雉
子と木葉猿を贈られた時、その返書に

神経の痛みにまけて泣かねども四夜さ寝ねば

心弱るなり

わが病重れる時に猿きぎしうちつれだちて訪ね

來にけり

山の婆の木彫りのきぎし雉子に似て雉子に似ざ

るがをかしかりけり

以上三首の即詠が書いてあるさうである。「神經の痛み」の歌は「改造」や「アララギ」に發表されたのより、前のものと思はれるので、此處へ書き止めて置くことにした。

大正十四年の「下伊那行」の最後の

駒が嶽は奇しき山かも晴れし日も己れ雲吐きて

隠るひにけり

の一首は、大正十四年三月號「アララギ」に掲載されたもので、その月の先生の面會日に、大坪草二郎君と村田利明君と來て居られた時、偶この歌の話が出た。その時先生は、

駒が嶽は奇しき山かも晴れし日も己れ雲吐きて隠

隠るひにけり

と、第二句をした方がよいと言はれたさうである。その後訂正が載らなかつたが、確かにさう言はれたと、最近村田利明君から聞いたことを附記する。

凡そこれ等の事を記したのは、後になつて、原作、改作、誤記等の區別が分からなくなることを虞れたのと、先生の推敲の經緯が多小判り、讀者の参考になると思つたからである。

○猶些少讀者の參考に供するため、本書に收めた短歌の發表年月及び所載雜誌新聞名を、左に附記する。

平福百穂畫伯老母に隨ひて信濃に來る。(大正十四年一月號「アララギ」)

傳田青磁君に寄す。(大正十三年十二月號、アララギ)
 木曾の秋。(大正十四年一月號、アララギ)
 冬二首。(大正十四年一月號、アララギ)
 柿蔭山房の冬。(大正十四年二月號、アララギ)
 齋藤茂吉氏歸朝。(大正十四年三月號、アララギ)
 冬の日。(大正十四年三月號、アララギ)
 下伊那行。(大正十四年三月號、アララギ)
 土肥温泉。(大正十四年三月號、四月號、六月號、アララギ、五月號、改造)
 長塚氏を追憶す。(大正十四年四月號、アララギ)
 柿蔭山房雜詠。(大正十四年五月號、アララギ)

五月上京。(大正十四年六月號、アララギ)
 初夏。(大正十四年七月號、アララギ)
 高山國の歌。(大正十四年十月號、改造)
 高木村。(大正十四年八月號、アララギ)
 浴泉十首。(大正十四年七月號、女性、八月號、アララギ)
 信濃下高井郡野澤温泉。(大正十四年九月號、十月號、アララギ)
 七月二日。(大正十四年九月號、アララギ)
 夏安居後。(大正十四年九月號、アララギ)
 柿蔭山房即時。(大正十四年十月號、改造)
 峡谷の湯。(大正十五年一月號、思想、改造、アララギ)

八月三十一日。(大正十四年十月號「アララギ」)
 訪歐飛行機。(大正十四年九月「大阪朝日新聞」東京朝日新聞)
 憶故人。(大正十五年一月號「新小説」)
 秋田行。(大正十四年十一月「國民新聞」十二月號「アララギ」)
 番町の宿。(大正十五年二月號「アララギ」)
 山房内外。(大正十五年一月號「改造」)
 秋去冬來。(大正十五年一月號「文藝春秋」改造)
 子ども演習にゆく。(大正十五年一月號「文藝春秋」)
 山村小情。(大正十五年一月號「現代」)
 新年其他。(大正十五年一月號「キング」)

老松集。河井醉茗氏に。(大正十五年一月「大阪朝日新聞」)
 上京汽車中。(大正十五年一月號「アララギ」)
 十二月下伊那行。(大正十五年二月「大阪毎日新聞」三月號「アララギ」)
 恙ありて一。(大正十五年三月號「アララギ」)
 恙ありて二。(大正十五年四月號「アララギ」)
 以上の如くである。
 ○本書を編輯するに當り諸方面より御援助を受けた。殊に齋藤茂吉氏、岡麓氏、平福百穂畫伯、土屋文明氏、中村憲吉氏等、巨細にわたり御高慮下されたこと感謝の至りである。なほ高田浪吉君、廣野三郎君よりは、校正其他に就いて多大の助言を蒙った。

○平福百穂畫伯は御多忙のところ、装幀挿畫並に卷頭の寫眞原版をお寄せ下された。卷頭の寫眞は、先生が嘗て（大正十二年暮）畫伯のお宅を訪問せられた折に、畫伯が撮影せられたものである。原版が見當らないで幾日も探して下された。元來、先生は一人で寫眞を寫されたことは稀であつて、この寫眞を本書に掲げることの出來たのは誠に有難い次第である。表紙繪は寒鮒と梅花であり、挿畫は先生の永眠せられた信濃諏訪高木の「柿蔭山房」の寫生である。畫伯が去二月二十一日に先生の病床を御見舞なされた時の作である。

○なほ卷頭に掲げた短冊は、向つて右は、大正十三年十二月頃の筆蹟であり、左は本年二月十二日の筆蹟である。一枚の横物の方は、昨年暮から本

年一月頃までの間に書かれたものである。

○本書の出版に際しては、岩波書店主人岩波茂雄氏の御盡力に依つもの多く、同書店の堤常氏、大谷市三氏、山田武匡氏其他の方々の御配慮を蒙つた。此處に記して感謝の意を表する次第である。

○來月の四日が先生の百ヶ日に當るので、それまでに發行されるとよいと念つてゐる。

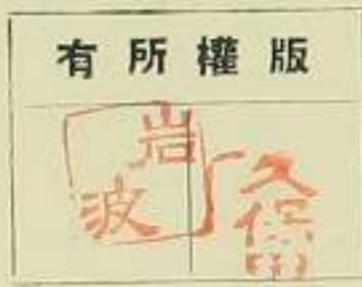
大正十五年六月十五日

麴町區下六番町アララギ發行所にて 藤澤古實謹識

大正十五年七月五日 印
大正十五年七月八日 第一刷發行

歌集 柿蔭集
定價 二圓

(寺島製本)



著者	故島 木 赤 彦
發行所	東京市神田區南神保町十六番地
印刷者	東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
	鷺 見 九 市

株式會社英秀會印刷

發行所 東京市神田區南神保町十六番地

岩波書店

電話 四谷一七八七〇番
攝替東京 二六二四六七〇番

ア ラ ラ ギ 叢 書

第十一編	第十編	第九編	第八編	第七編	第六編	第五編	第五編	第四編	第三編	第二編	第一編
伊藤左千夫著	齋藤茂吉著	長塚節著	島木赤彦著	齋藤茂吉著	中村憲吉著	齋藤茂吉著	齋藤茂吉著	島木赤彦著	古泉千樞著	齋藤茂吉著	中村憲吉著
伊藤左千夫全集	あられたま	長塚節歌集	氷魚	童馬漫語	林泉集	續短歌私鈔	短歌私鈔	切火	屋上の土	赤光	馬鈴薯の花
品切	定價二円六十一錢	品切	定價二円五十錢	定價二円八十錢	定價二円二十錢	品切	品切	品切	未刊	定價二円六十錢	古今書院發行 定價二円八十錢

書叢ギララア

第十二編	松倉米吉著	松倉米吉歌集	古今書院發行 定價一円五十錢
第十三編	土田耕平著	青杉	古今書院發行 定價一円八十錢
第十四編	石原純著	鬘日品	切
第十五編	中村憲吉著	しがらみ	岩波書店發行 定價一円八十錢
第十六編	島木赤彦著	歌道小見	岩波書店發行 定價一円五十錢
第十七編	アララギ發行所編	灰燼集	古今書院發行 定價一円八十錢
第十八編	島木赤彦著	太虚集	古今書院發行 定價二円二十錢
第十九編	村上成之著	翠微	古今書院發行 定價一円五十錢
第二十編	土屋文明著	ふゆくさ	古今書院發行 定價二円二十錢
第二十一編	島木赤彦著	萬葉の鑑賞及其批評	岩波書店發行 定價二円四十錢
第二十二編	岡篁著	庭苔	古今書院發行
第二十三編	島木赤彦編	アララギ年刊歌集	岩波書店發行 定價一円五十錢

